

## 巻 頭 言

# 博物館にとっての自然保護

三重県総合博物館（みえむ） 布 谷 知 夫

博物館にとって自然保護にどう向き合うのか、ということは大きな課題である。自然史系の博物館や自然を扱う総合博物館だけの問題ではなく、歴史系の博物館や美術館にとっても、現代的な課題として環境保護がある。環境保護は自然保護も含んだより広い概念であり、どの博物館にとっても避けては通れない。

最近では博物館においても環境に対する配慮が行われるようになってきている。いわゆる地球にやさしいエコな工夫は普通に行われ、館内や事業の実施において、クールビズ（ウォームビズ）や休息時間の消灯などは当たり前になっており、新しい博物館を建てる際には可能な限り環境に配慮する努力をしている。2014年の4月に新しく開館した三重県総合博物館（みえむ）の建物も、開館前にCASBEE（建築環境総合性能評価システム）のSランクを頂いている。

けれどもそのような動きとは別に、博物館の基本方針として環境を、或いは自然保護をどう扱うのか、あるいは展示や事業の中でどのように扱うのか、ということについてはあまり議論がされていない。以下の議論は便宜上、自然を扱う博物館にとっての自然保護を意識して進めるが、歴史系博物館や美術館などにおいても同様の課題があることは指摘しておきたい。

博物館の方針として自然の保護を課題とした館が無かったわけではない。ただそれは瑞浪化石博物館が、化石産地のある場所の保護を課題とし、秋吉台自然科学博物館の設立の経緯として、秋吉

台の保護に関わる地元の動きがあったことなど、特定の事情でその場所を残すことを課題とした博物館である。博物館のターゲットエリアやその他の場所での自然の保護を博物館の方針として課題にあげている館は、おそらくないと思う。もちろん生物多様性を取り上げ、環境の変化や環境に関する課題を展示で取り上げている館はあるが、それは博物館の課題あるいは方針の問題とは少し異なる。科学館でも同様な展示が見られるが、その展示の横に原発を推進する展示があるなど、環境に関する知識を伝える展示であり、博物館の運営方針とは限らないことが分かる。また「〇〇環境博物館」のような博物館は全国に多いが、それも環境問題について説明することを課題とした博物館が多い。

それでは博物館にとって自然保護はこれまでどのように捉えられたのだろうか。それは博物館は必要な情報を提供する場、という考えである。博物館が直接自然保護運動に参加し、運動に協力するのではなく、自然保護にも役に立つ地域の自然に対する情報や必要とされる情報をいつでも提供する、そのうえで、学芸員個人がそういう団体と共に活動することについては妨げない、ということだろうか。自然系の博物館には地域の保護に関わる個人からの相談は多い、その相談に乗り、運動に対する提案などを行いつつ、そのための情報は提供する、でも博物館としてはそれ以上の関わりは持たないのが普通だ。

これに関する例として滋賀県の琵琶湖博物館で

は、環境保護、自然保護を含む社会問題については扱わない、という方針を立てていた。開館は1996年であり、開館準備の時代の議論である。その趣旨は、社会問題は時代ごとの背景によって生じるものであり、当然、時代によってその評価は変わるので、博物館は個々の社会問題に対して評価をするのではなく、情報を整理してそれらの問題について考えるための情報発信をしていこう、というものであった。琵琶湖をめぐる環境問題全般を視野に入れた課題整理であった。実際には琵琶湖問題に巻き込まれ、或いは学芸員個人は様々な活動にもかかわることになったが、博物館の社会問題に対する方針は変わっていなかった。

博物館に対する世の中の考え方も、また当然のこととして博物館界内部での博物館の在り方についての考え方も、この10数年で大きく変わってきた。展示や事業に対する考え方も変わっているが、同時に博物館の役割についても議論が進められるようになってきている。大きな流れとしては、従来の博物館の役割は、地域の資料を収集整理してその研究成果を発信することで人々に活用してもらう、ということであった。それに対して、最近では、そういう資料と情報を使って学ぶ人を増やすことで、その人たちが地域社会で元気に活躍し、結果として地域社会が元気になる、普通に言えば街づくりの力になるということが、博物館の役割として加えられるようになってきている。博物館の資料研究の結果として地域情報が広がり、その情報を使った観光や地場産業の復興での街おこしということもある。

そういう博物館と地域社会とのつながりの中で、博物館にとって自然保護はどういう位置づけになるのだろうか。もちろん自然保護と言っても、非常に幅広く、いろいろな内容を含んでいるが、現在の主流の自然保護は、例えば地域の生物多様性

を守り、残していくという立場である。生物多様性は知られているように単に生物の種類や生態系を残すという以上に、人の伝統的な暮らしを守り維持していくという面も持っており、博物館にとっては本質にかかわる分野である。

博物館が実践的な運動に参加していくという事例は、特別な事情をのぞいてそれほど起こらない。しかし地域社会とのつながりを強くしようという博物館にとって、自然保護にかかわりを持つということは必然の課題となっている。これまでは要請された情報を提供するという立場にとどまっていたが、これからは地域社会に出て、自然保護運動も含めて、地域の様々な市民活動団体やキーパーソンとなるような個人とのつながりを持ち、博物館とそのターゲットエリアの中を繋ぐ、ゆるいネットワークを作る役割が求められる。そのようなネットワークは、その方向性を方針として持つ組織が動かなければ実現は難しく、その点、資料と情報そして研究者である学芸員がいる博物館の役割としてふさわしいものである。もちろん、ネットワークの中心に博物館がいる必要はなく、あくまで博物館につながる友の会や活動グループ、同好会などと共に一つの団体として参加し、それぞれの団体で何か困ったことがあったり、知りたい情報があるときに、そのネットワークの中で相互に情報交換をしながら、問題を解決できるような連携である。

そういうネットワークの中に、自然保護を課題としている市民団体や個人を積極的に招き入れ、博物館と多くの団体が一緒に地域のことを考えているという状況を作ることが、博物館にとっての自然保護への取り組み方であり、結果として自然保護団体にとってもプラスになるだろう。博物館は間接的であっても積極的に自然保護にもかかわっていくという姿勢を持つことが必要である。